



巻 頭 言

飽 食 の 中 で

(財)日本植物調節剤研究協会 理事 福田秀夫
(財)残留農薬研究所 理事長

昼食時、オフィス街にある食堂はどこも超満員である。週末、高級レストランから大衆食堂まで何所も繁盛している。どこでも賑やかな談笑の中に食事が摂られている。味の良し悪しがささやかれることはあっても、その食事が安全か否かを話題にし乍ら食べることはまずあるまい。

それなのに、近頃私共の研究所を訪れる消費者の皆様は食品に残留した農薬の安全性を非常に心配されている。心配だから皮を厚くむいて調理していると言われるので、この人は外食はできないかなと思ったりする。農薬取締法が改正されてから20年も経とうというのに、なぜか、このような来訪者が急に多くなってきた。

食品に残留した農薬からは誰も逃げる事ができない。自分の判断で避けることができない。長い年月の間に受ける影響は誰でも同じようなものになる。人類全部が運命共同体とも言える。従って、食品に残留した農薬の悪い影響は絶対無いように十分配慮されているのである。

消費者という表現は生産者に対して用いられるのであろうが、食品を摂らない人はいないので、誰でも食品の消費者である。農薬を製造している人や農薬を使用している人、さらに農薬の試験研究に従事している人達は、食品から摂取されるかもしれない極微量の農薬よりもはるかに高い濃度の農薬に曝露されていることになる。従って、一般の消費者は最も安全な立場にあることになる。ところが、この人達が一番心配しているように思われるのはなぜだろうか。

農薬についてはなぜか話の短絡や飛躍による極めて無責任な情報が少ない。一般の人々にはこれらの話が正しいのか正しくないのかを判断する材料が殆んどない。しかも、このような一面

的な情報は一見極めて魅力的な面もあるので感情的に賛意をあらわす人もいるものと思われる。そして、専門家や行政に対する偏見もあるようで、一部の人々の価値観だけでことが進められているのではないかという疑いを持っている人もいようである。

我々は知らない間に日常生活の中で数万という化学物質に曝露されている。これらの安全性について農薬ほど広汎に詳細に調査されているものがあるのだろうか。我々の健康や生命を明らかに脅かしているものに対して、あまりにも寛大だと思われる面もあるのに、なぜ農薬だけこれ程疑う人がいるのであろうか。

農薬の開発に英知を傾注している人々も、その安全性を広汎に詳細に試験している人々も、その結果を評価したり審議したりする人々も、それらの結果として基準等を作る人々も、皆人間であり、消費者である。誰だって自分らの健康に少しでも悪い影響のあるものは絶対にいやである。農薬は各分野の大勢の専門家の真剣な努力の結果として万全の配慮がされているものである。

ここで詳細について述べる余裕はないが、訪問者の皆様に、難しい専門用語はぬきにして時間の浪費も惜しまず話し合うと、なるほど納得していただけるようだ。研究所の業務を見学して、これ程まで徹底した試験がやられているとは知らなかったと驚かれるのである。個人が何もかも知ることは不可能であり、元来その必要もない筈だ。むしろ、無責任な情報を知っていることが問題なのである。一面的な情報で一般消費者の皆様の不安をかりたてている人々は今夜はどこでどんな料理に舌づつみを打たれていることだろうか。